

ミッシンダリンククとしての「代作」

——徳田秋聲の新出資料「銭屋五兵衛」の射程

大木志門

一 新出資料・徳田秋聲「銭屋五兵衛」と

掲載誌『日本勸業銀行月報』

現代の研究においてインターネットの活用は欠かせないが、SNSがそのきっかけとなることもある。このたび室生厚星研究にたずさわるニシヅキサヲナ氏より「Twitterを通して情報提供を受け、徳田秋聲の全集および既存の著作目録類に未収録の小説「銭屋五兵衛」を掲載した『日本勸業銀行月報』（勸業債券月報社）の原誌六冊を借用することができた。筆者だけでこの資料に行き当たることができた可能性は極めて低く、氏のご厚意に心より感謝申し上げる。

本稿ではこの作品の実態を明らかにするとともに、さらにそこから見えてくる研究的射程を探ってみたい。論中で詳しく述べるように、おそらく本作は秋聲が誰か別の書き手に執筆を委ねた所謂「代作」（ゴーストライティング/名義貸し作品）であるが、当人の関与の度合いの不明な「代作」であつても、いや他ならぬ「代作」であればこそ興味深い事実が明らかになる資料なのであ

る。そのあたりを近年の秋聲研究および代作研究の動向を踏まえつつ以下に論じてゆく。

さて秋聲の小説の掲載誌『日本勸業銀行月報』は一八九七（明治三〇）年設立の日本勸業銀行（現みずほ銀行の前身の一つ）の関連会社である日本勸業銀行月報社（のち勸業銀行月報社・勸業債券月報社）が刊行していた雑誌で、一九〇五（明治三八）年五月に創刊された。『日本勸業銀行史 特殊銀行時代』（日本勸業銀行調査部、一九五三年）によれば、日本勸業銀行月報社は日露戦争時に「債券業務に関する別働隊として設立され」、当初は同銀行の「勸業債券、貯蓄債権の償還番号表に債券に関する各種の要報逸話を附加え（中略）代理店、取扱店、郵便局に配布し、特約購買者に低価で販売し」た『日本勸業銀行月報』を発行するのが主な業務であった。しかし同誌が日本勸業銀行の存在を全国に宣伝普及させる役割を果たしたことで、日本勸業銀行月報社は一九〇八（明治四一）年より債権売買の媒介を担うことになり、のち日本勸業信託に改称して日本勸業角丸証券（一九六七年設立）の前身となった。

以上のように書店に流通しない特殊な性格の雑誌であることから、『日本勸業銀行月報』は公共図書館および大学図書館での所蔵が極めて少なく、国立国会図書館や日本近代文学館にもほとんど所蔵がないばかりか、揃いで所蔵している館はおそらく存在しない。現状ではそれらの蔵書をあわせても全冊が揃わない状況であり、その中では大分大学経済学部教育研究支援室蔵の三三七号（一九三三年）が最も新しい号となる。しかし同誌にはその初期からかなり多くの文壇人が寄稿しており、他にも未発見の文学作品が眠っている可能性が高い、なかなか研究しがいのある雑誌なのである。

同誌は父・水野勝興が農商務省から九州鉄道株式会社を経て日本勸業銀行の重役となっていた縁で、その編集に水野葉舟（本名・盈太郎）が深く関わっていたことが分かっている。一九一七（大正六）年からは直接編集実務にも携わっていたようだが、葉舟は一九〇六（明治三九）年から同誌に寄稿しており、秋聲以外に白秋、風葉など新詩社や紅葉門下・龍土会周辺の文壇人が起用されていることから、当初からその人選には彼の人脈が活用されていたと考えられる。なお同誌はやはり葉舟との関係から、柳田民俗学との関わりで言及されることが多い。佐々木喜善や柳田国男と出会う中で心靈主義への傾倒を深めていった葉舟が怪異体験に関わる文章を主に寄稿したのがこの『日本勸業銀行月報』であり、また葉舟の斡旋により柳田や佐々木喜善らも同誌に寄稿しているのである³。

徳田秋聲「銭屋五兵衛」は同誌第一三二号〜一三六号（一九一六年一月〜六月）への連載であるが、一回あたりの掲載頁数は四

頁から五頁と少なく、全回分をまとめても短篇小説の分量である。生涯にわたり市井の人びと、特に自身や周囲の人物をモデルに小説を書き続けてきた秋聲であり、郷里金沢の实在の偉人を題材にした伝記小説という点で、本作は極めて例外的である。後述のように実際に執筆したかどうかの問題はあるにせよ、秋聲名義でこのような作品が発表されていたことが判明した点がまずは発見にあたる。

二 秋聲「銭屋五兵衛」の原典を探る

本作の題材となった銭屋五兵衛（一七七四—一八五二）は江戸後期の加賀の商人であり、海運業を興して松前や東北地方との交易に従事し、さらに加賀藩の御用商人となって海の豪商として名を馳せた人物である。しかし晩年に河北潟の埋立事業に絡み、一族とともに捕縛され獄死した。莫大な資金力で藩財政を支えたため優遇されていた五兵衛であったが、藩内の有力な支援者を失ったこともあり、息子と番頭の死罪および財産没収、お家断絶という極めて厳しい弾圧を受けたのであった。そのような五兵衛に対する当時の一般的な評判は公に取り入って私腹を肥やした庶民の敵「奸商」であり、その悪感情は明治維新後まで続いたようだ。

しかし、若山喜三郎「新版 銭屋五兵衛」（一九八二年、北國新聞社）によれば、新政府の「啓蒙的」な姿勢で書かれた『外交志稿』（一八八四年、外務省記録局）が五兵衛を比較的客観的に記述して以後、明治二十年代の産業革命進行期に国家主義的な実業人の伝記が流行する中で、幕府の鎖国政策に抗して海外貿易を

行った開国主義者にして「受難の『商傑』」へ評価が反転していったという。そして日清日露戦争下になると「海国日本」を象徴する人物と位置づけられ、その後も評価が続き、満洲事変後の一九三三（昭和八）年には海外進出の先人として郷里の金石（金沢の港町、旧名・宮腰）に像が建立されている。

五兵衛はその間に多くの偉人伝や小説の材料となったが、木越隆三『錢屋五兵衛と北前船の時代』（二〇〇一年、北國新聞社）が詳細に論じるように、そこで流布した五兵衛イメージはほとんどが虚像である。そして戦後から現在に至るまで舟橋聖一『海の百万石』（上中下巻、一九五五―五六六年、大日本雄弁会講談社）をはじめ、村上元三『海を飛ぶ鷹』（一九八九年、徳間書店）、南

原幹雄『錢五の海』（上下巻、一九九五年、新潮社）、童門冬二『海の街道 錢屋五兵衛と冒険者たち』（上下巻、一九九七年、学陽書房人物文庫）、津本陽『波上の館 加賀の豪商・錢屋五兵衛の生涯』（二九九九年、中公文庫）など五兵衛をモデルにした小説が続々と生み出されたが、これらもほぼ全てが不確かな伝説を元にしてゐる。なお現在流通している事典類でも、五兵衛の最盛期は江戸、大坂、長崎、新潟、酒田、青森、弘前、松前、箱館など三十以上の港に支店を有し、持船は二百艘を超えたように記されているが、木越によれば実際の持船は最盛期で十五艘程度、のべでも三十五艘程度であり、むしろ五兵衛の前半生は堅実な船問屋と捉えるべきであるという。

なお加賀藩には他にも同時代の木谷藤右衛門をはじめ五兵衛に匹敵する豪商が存在したが、五兵衛ほどその物語が多様に流布した存在はいない。それゆえ、いくつもの物語のバリエーションを

持っているが、秋聲「錢屋五兵衛」の内容は中でもかなり異質である。本作のあらすじは以下の通りである。

加賀の船問屋・木谷藤右衛門の下で働いていた五兵衛は相場に手を出し金千両を持ち出した罪で捕まるが、藤右衛門の十八歳の娘お芳の懇願によって辛くも無罪となる。人柄を見込まれた五兵衛は藤右衛門に、お芳と結婚し木谷家を継ぐことを提案されたが、独力で身代を作る宣言をして不興を買ひ放逐される。実は五兵衛にとつて父の悲願である錢屋の再興こそ第一であり、それゆえお芳の思いを拒まざるを得なかったのである。

その後菓子売りへと落ちぶれた五兵衛に、彼の友人である弁吉の勧めでお芳は「大福丸」を密かに贈る。これを用いて回漕業を始めた五兵衛は、まず津軽方面で商売を成功させ手持ちの舟を増やしてゆく。そこに密かに協力してくれたのも盟友の弁吉であった。ある日、五兵衛の乗る大福丸は流されて無人島へたどり着く。同地に「大日本錢屋五兵衛所有地」の立札を立てた五兵衛は露西亜船と出会う。海外貿易の端緒を得て郷里の宮腰へ戻った五兵衛だったが、待っていたのはお芳の死の報であった。

のち再び大福丸で出港して遭難した五兵衛一行は、米国の商船に助けられる。その船長から竹島を拠点にした密貿易を持ちかけられた五兵衛は提案に乗り、以後拏拏での露西亜との貿易、竹島での米国との貿易を駆使して莫大な利益を得る。やがて六十二歳になった五兵衛の大福丸は三度目の遭難をし、今度は遠く米本土のブレイトンに流れ着く。ここで現地の豪商と密貿易の協定を結んだ五兵衛はついに米国で億万長者となった。そのまま米国への永住も考えた五兵衛だったが、自らの使命を再認識し、腹心の

他三郎を帰化させて自身は帰国する。海の王となった五兵衛は藩で木谷藤右衛門とともに要職を得て、日本各地に支店を持つようになった。

やがて古希を迎えた五兵衛は郊外の寺中村に隠居宅を作り、商売を長男の喜太郎と三男の要蔵に譲る。そして最愛の要蔵に手柄を立てさせて武士の位を与えようと、河北潟の新田開発の大事業を始めるが、漁民の反対に遭うばかりでなく難工事に苦しむ。そこで一計を案じた五兵衛は大量に貯蔵していた石炭を埋立てに用いることにし、これで工事は順調に進むかに見えたが、突如湖水の魚が死に始め、またそれを捕って食べた周辺の民にも死者が続出した。これを銭屋一門が毒を撒いた結果と見た藩は、病床にたった五兵衛をはじめ一族を捕らえて裁判にかけた。五兵衛は自身一人の罪を法廷で堂々と述べて死んでゆき、銭屋の家名は絶えたという。

本作は一読してわかる荒唐無稽な話であり、まず五兵衛がアメリカに渡って富豪になったことは言うまでもなく、アメリカやロシアと密貿易を行った事実も存在しない。そもそも五兵衛は同じく豪商として名を残す高田屋嘉兵衛のような自身が船乗りである商人ではないのだ。また作中で重要な役として登場する木谷藤右衛門の娘・お芳は記録には存在せず、彼女が五兵衛に提供する「大福丸」も五兵衛が所有していた舟の名にはない。もとより五兵衛が木谷家に奉公に住み込んでいたことや、弁吉として登場する地元の発明家・大野弁吉と親交があったというのも根拠のない俗説に過ぎないのだ。航海中の三度の遭難による幸運の到来というのもいかにも物語じみているが、本作は木越隆三前掲書が紹介する

五つの密貿易伝説、「北米渡航説」、「竹島での密貿易説」、「口永良部島でのイギリス人との密貿易」、「ロシア人との交易」、「タスマニア渡航説」のうち三つを貪欲に取り込んだテクストである。木越は河北潟の事業による五兵衛への処罰が当時の人々に重く感じられたために、実は銭屋が藩と組んで密貿易を行っていたことを隠蔽するために処罰されたという流言が生まれ、これが後に海外貿易の伝説につながったのではないかと推測している。

前述のように銭屋五兵衛にまつわる伝記や物語は数多く存在し、特に明治以降多く出版されていたが、その中でも徳田秋聲「銭屋五兵衛」は異端に属する。多くの「銭五譚」はある程度実話に基づいた形式を持つことが多いが、本作はあからさまに物語的なのである。いくつかの代表的な五兵衛伝を読んでみたところ、本作のみに現れるエピソードが多いことに気づいた。そこで試みに、国立国会図書館の電子化テキストを横断検索できる「次世代デジタルライブラリー」(<https://abn.ndl.go.jp/dl/>)でキーワード「銭屋五兵衛」と本作に固有と見られる固有名詞「お芳」と「大福丸」などを組み合わせて検索したところ、渡辺霞亭『銭屋五兵衛』(上下巻、一九一〇年、梁江堂)だけが重なることがわかった。

続いて「国立国会図書館デジタルコレクション」で一九一六(大正五)年までに刊行された銭屋五兵衛関連の全ての書籍の内容を確認したところ、実際に同書の物語内容だけが本作と非常に似通っていることが判明した。両作を読み合わせると、本作は霞亭『銭屋五兵衛』のダイジェスト版と言っても良いくらいなのである。つまり、本作は先行する霞亭の著書を参照して執筆された可能性が高いということであり、梁江堂版の上下巻を合冊した書籍

が秋聲作の前年一九一五（大正四）年に霞亭会より刊行されているので、こちらを参照した可能性もある。

ただし秋聲と霞亭のテクスト（以下前者を「秋聲版」、後者を「霞亭版」と呼ぶ）には大きな差異が存在し、実は霞亭版は五兵衛父子の天下が終わりを告げる河北潟埋立事業の始まりで終わっているのに対し、秋聲版は他の多くの五兵衛伝と同様にその獄死までが語られるのである。そこで霞亭版の初出紙である『大阪朝日新聞』（一九〇九年四月三日～二月二日）を国会図書館所蔵のマイクロフィルムで確認したところ、梁江堂と霞亭会双方の単行本は新聞連載の第二十九章の途中までしか収録されておらず、数十回分の続きがあることが判明した。実際、霞亭版は非常にまとまりが悪く尻切れトンボに終わっている本文なのである。単行本に収録されていない部分には、かなり詳細に藩内の政情の変化や河北潟の漁民との対立から沿岸で死者が出る過程、そして五兵衛父子が捕えられ裁判にかけられるまでが描かれている。ここだけが取り上げられて講談や芝居の題材にもなってきた、加賀藩のお家騒動にまつわる父子の悲劇がなぜ単行本に収録されなかったかは謎だが、まさか「お上」による裁判の妥当性を問うているゆえに、初版本刊行の年に起きた大逆事件に配慮したわけではなからう。単純に分量的な問題なのか、何か上演などの都合で刊行を急いだのであろうか。いずれにせよ、再刊時にも修正されないあたりに、当時の大衆小説出版の杜撰な状況が表れていると言えようか。

同時に、新聞連載で霞亭が書いた最終部分は秋聲版のラストとかなり乖離があることもわかった。そこで再び前記のプロセスで

本作と似た表現や構成を持つ書籍を調査したところ、本作発表以前に刊行されている中では二冊の偉人伝が特に五兵衛の最晩年の記述に共通点が多いことが判明した。国府犀東『錢屋五兵衛』（一八九七年、裳華書房）および桐生悠々『少年読本第八編 錢屋五兵衛』（一八九九年、博文館）がそれである（以下それぞれ「犀東版」と「悠々版」と呼ぶ）。いずれも著者は金沢の人で秋聲と直接の面識があり、特に悠々は一九〇一（明治二四）年にともに第四高等中学校を中退して上京し紅葉への弟子入りを試みた盟友である。

本文を個別に照合したところ、秋聲版は悠々版と表現レベルでかなり一致することが判明した。たとえば榮華を極めた五兵衛が、老年になってわざわざ河北潟の埋立てという難事業に挑んだ理由を語る部分である。

五兵衛が八子中三男要蔵、生れながらにして明智あり、商業の機を見ること父に劣らず、此を以て五兵衛最も要蔵を鍾愛す。河北潟埋立の工事は、此要蔵の為に興されたるなり

桐生悠々『少年読本第八編 錢屋五兵衛』

此の監督役の要蔵は生れながらにして明智があつた。商業の機を見ること父に劣らず。五兵衛もまた深く要蔵を愛し、何かな要蔵の為に世間に肩はゞの利く地位をつくつてやりたかつた。

徳田秋聲「錢屋五兵衛」

さらに、五兵衛の取り調べにおける陳述の場面の表現などは「さて五兵衛は嚴重に吟味せらるゝも、毫も恐るゝの色なく、弁舌はやかに確答しつゝ、其罪状に暗きところなかりき」(悠々版)、「さて五兵衛は嚴重に吟味せられたが、毫も恐れる色なく、弁舌もさはやかに確答しつゝ、決してその罪状に暗いところはなかつた」(秋聲版)とかなり一致している。なお、この五兵衛の陳述は「数ある錢五伝の元祖」(木越隆三前掲書)とされる岩田以貞『商人立志寒梅遺薰 錢屋五兵衛実伝』(一八八七年、尚書堂)などに既に見られるものであり、犀東も悠々もこれら先行する文献を用いて執筆したのである。だが表現の類似から秋聲版は悠々版をこの部分の直接の典拠としている可能性が極めて高い。同書を要約・抜粋しながら言文一致体に書き直したと考えられるのだ。

だとすれば、徳田秋聲『錢屋五兵衛』は五兵衛の生涯のほとんどのについては渡辺霞亭『錢屋五兵衛』に大筋を借りつつ、その書籍本文に掲載されていない五兵衛晩年の河北潟埋立てにまつわる事件についてのみ、桐生悠々の子供向け偉人伝『錢屋五兵衛』を借りてつなぎ合わせた作品ということになる。もしかすると、霞亭の本を参照しながら書き進んできて結果がないことに気づき、急遽悠々の本を参照することにしたのかもしれない。

三 秋聲「錢屋五兵衛」の「作者」は誰か

出版界における五兵衛の人氣は戦前に継続して見られたため、関連書籍の出版点数は年々とこまで顕著な違いは見られな

い。しかし出版物全般における語彙「錢屋五兵衛」の出現頻度の推移を「NDL Ngram Viewer」(<https://abndl.go.jp/ngramview>)を用いて可視化すると、一九〇九(明治四一)年と一九一五(大正四)年に二度のピークがあることがわかる。つまり日露戦争後と第一次世界大戦中であり、前者では既述のように海国日本を象徴する人物として書物に表れていたのが、大戦期以降そこに加わるのは成功を取めた実業家としての五兵衛像である。現代風と言えば、グローバルゼーションによって巨万の富を得た人物ということになるが、たとえば易占術の書『運氣活断口伝書』(一九一五年、高島易断所神宮館)の記述「投機心盛んで他人の出来ない事もよく是れを成し遂げ功名を博する運命です(錢屋五兵衛の如く)」などにそれは典型的に表れている。また「国々の港を我ものにした加賀の錢屋五兵衛」の没落を「今の成金は夫な事は無い」と比較する鶯亭金升『江戸ッ子のチヨン鬘』(一九一七年、豊文館)や「日本に紀伊国屋文左衛門あり錢屋五兵衛ありといふことが直ちに日本国民は皆文左衛門なり五兵衛なりといふ都合には參るまい」と述べた後に現代の「五兵衛」「文左衛門」として三菱や三井などの財閥を列挙する茅原廉太郎『國民的悲劇の發生』(一九一八年、祖国書院)にも当時の流行語である「成金」に重ね合わされる五兵衛像が反映しているであろう。よって、一九一六(大正五)年発表の秋聲作品の題材に錢屋五兵衛が選ばれたことは、何よりこの大戦景気の時代の「偉人」であったためと考えられる。

ただし本作は伝記小説であることを割り引いても、文体に全く秋聲らしさが出ていない。たとえば「あはれ、太平洋を股にかけ

た五兵衛が老後の望みのみすばらしいことよ。大鵬の心、縮むて(つむ)燕雀の豆魂となつたが、子の愛に溺れての盲目から心あるもの五兵衛の為にこの一段は、泣き笑ひの、熱い涙と、熱ひ笑ひとを加へて、狂せしむばかりに五兵衛を嘲罵すべきである」などという箇所は、通常の秋聲であればここまで時代がかつた表現を用いて、かつ対象への評価を断定的にくだすことは考えられない。また、金沢出身の秋聲はある程度以上、五兵衛の生涯について知識があつたはずであり、あえて史実から遠い霞亭版を種本にしたことも不思議な点である。言うなれば霞亭版は銭屋五兵衛をキヤラクターとして用いた二次創作的作品であり、少し前に話題になつた山下泰平『舞姫』の主人公をバンカラとアフリカ人がボコボコにする最高の小説の世界が明治に存在したので二〇万字くらいかけて紹介する本』(二〇一九年、柏書房)が取り上げたような明治の奇想エンターテインメント小説に近いのである。

そこから、おのずと秋聲が題材だけを提示して代作者に執筆させた可能性が考えられることになる。言うまでもなく、それは本作の原典と推定される二著の作者、すでにこの時期には『新愛知新聞』の主筆となつていた桐生悠々でも、売れっ子の新聞小説作家であつた渡辺霞亭でもないだろう。仮にどちらかだとすれば、自作をベースにして全体を執筆すればいいわけで、そこに他者のテクストを混入する必要はないからだ。そこで最も可能性が高いと考えられるのは、秋聲の父方の親戚にあたる劇作家で漱石門下の岡栄一郎である。金沢出身の岡はこの一九一六年春に、東京帝大英文科卒業後の前年九月に入社したばかりの大阪朝日新聞を辞めて上京し、秋聲は彼の面倒を見ることを親族から依頼されてい

た。⁽⁸⁾以後、文学の道を目指すようになり、秋聲のいくつかの文章を代作したとされ、帝大時代から劇評を執筆しのち劇作家として「意地」(一九二四年に「返り討」と改題され上演)「松永弾正」などの歴史物を書いた岡に銭屋五兵衛という題材はいかにもふさわしいし、大阪朝日時代に知つていた霞亭の作品を用いたと考えれば自然でもある。同紙の専属作家であつた時代もある霞亭は一九一三(大正二)年から翌年まで『大阪朝日新聞』で「渦巻」を連載し舞台化もされるヒット作になつていたので、仮に直接面識がなかつたとしても霞亭のことは当然念頭にあつたであろう。岡が手持ちの霞亭の著書を用いて執筆したが、完結していないことに気づいて秋聲が悠々の著書を貸したと考えれば、前述した本作のカメラ的性格も説明可能ではある。ただし岡と秋聲の関係を紹介した井口哲郎「徳田秋聲と岡栄一郎」(二〇〇二年一月『徳田秋聲全集月報二六』)や同氏の上田正行との対談の抄録「『いちがい』金沢人―岡栄一郎と秋聲」(二〇二二年三月『夢香山』)に岡の「銭屋五兵衛」への関与をうかがわせる記述はないため、以上の推理はあくまでも物証を欠いた想像の域を出ない。

なお、霞亭版と悠々版のコラーージュである秋聲版「銭屋五兵衛」の物語的な特徴は、霞亭がかなり詳細に描いた藩の内情に絡む部分を全くカットしていることと、魅力的な女性の好意や先進国であるアメリカでの永住権獲得など様々な欲望に打ち勝つた五兵衛が、最愛の息子を武士にしたいという願ひによつて無謀な河北潟開墾に挑み、生涯唯一の判断を誤つたことを重視している点にある。先行して五兵衛伝を著した金沢出身の国府厚東と桐生悠々はいずれも彼の捕縛を「奇獄」という表現を用い、その汚名をそそ

こうとしているが、秋聲版では五兵衛の発案で河北潟に石炭をまいたことも極めて淡々と事実として語られる。この「奇獄」の要素を省いたことは単純に紙幅の都合とも捉えられるが、ある作劇の意図が感じられなくもない。

本作に関連する三種の五兵衛伝を出世物語として比較すると、犀東版と悠々版は天才型の成功者が悲劇の最期を遂げることを強調した物語であり、霞亭版は底辺から身を起ししながら奇跡的な成功を得た男と、その裏にあったロマンズと女性の内助を強調した物語と言える。そしてこの霞亭版をベースにした秋聲版では、五兵衛の成功は全て女性の助けと極端な偶然の産物によって成立しているとも読め、表面的には五兵衛の才能を称揚するようでありながら実際にはそれを裏切る物語となっているのだ。そこに悠々版を接ぎ木することで子への愛ゆえに晩節を汚した老雄という像が成立しており、これは『日本勸業銀行月報』という雑誌に掲載する物語のメッセージとしてあまり望ましくないのではないか。そこで繰り返される成功譚があまりに御伽噺じみて見えることも、本誌の読者の期待にはそぐわないものであつたらう。いや、すでに地道な労働と克己による立身出世の世は過ぎ去り、株などの投機で働かずして利益を得ようとする高度金融資本主義に入りつつあつたと言う意味で、本作は世相に合致していたと考えるべきであろうか。ともあれ、大戦景気のバブル時代の夢物語として本作は両義的に機能しているのである。

ところで、本作発見のより広い研究的意義は、「代作」という行為が大正期以降に「文学」の周縁的な領域に残存した証拠の一つと捉えられることだ。知られているように、明治三十年代まで

文壇の慣習として蔓延していた代作や原稿二重売りは、「作者」意識の浸透によって明治四十年代になって明確に悪と見なされるようになった。その象徴的な出来事が小栗風葉や真山青果の文壇追放である。その後の代作はまさに「ゴーストライティング」として地下に潜り、文芸誌における純文学的小説以外の領域で主に生き残ることになった。その舞台が通俗的小説や児童向け小説、創作法や理論書などであつたことは、拙著『徳田秋聲と「文学」』（二〇二一年、鼎書房）の第二章『代作』から考える―紅葉・秋聲による雑報記事『臙脂虎』をめぐる―でまとめて述べたことがあるので、ここでは繰り返さない。

近年の代作研究は、原稿の筆跡の解析から実作者を特定しようとする方法や、テキストマイニングを利用して文体の分析から実作者を推定する研究など実証的な方向に発展しており、これらの今後も期待されるが、他方の人文学的意義は、必ずしも誰がその作品の本当の作者であるかが問題なのではなく、そのような状況を可能にした文壇システムの探究や、成立した「作品」に「作者」の単独性を揺るがす間テクストの性格を見いだすことに存する。本作「銭屋五兵衛」の場合も他者による複数の先行テクストを利用した作品であり、そこでは名義上の作者（秋聲）および代作者だけでなく、霞亭や悠々に加えその他複数の潜在的な「作者」が関わっていることになる。この場合、秋聲や代作者が彼らに著書を利用する許諾を取っていたかは不明だが（おそらく取っていないであろう）、当然そこには「剽窃」（著作物の無断使用）という問題も含まれよう。

前掲の拙論（『代作』から考える）では、秋聲と尾崎紅葉の

代作／共作的な性格を持つ作品（新聞記事）について、その後には秋聲が展開してゆく複数の「女ものごと」との関係を示唆してみたい。それは先回りして述べれば、一九一五（大正四）年の秋聲作品と一九一七（大正六）年のそれとの間の断絶に一九一六年発表の「銭屋五兵衛」を当てはめてみれば不思議とびったり収まることに関わる。そして、そのことは大正期の秋聲研究にとってなかなか興味深い視座をもたらすのである。

四 女性・家庭・労働―「あらくれ」から「奔流」へ

秋聲は大正初年代に女性の家庭と労働の関係を扱った作品を集中的に発表している。最も知られているところでは、「銭屋五兵衛」の前年、一九一五（大正四）年に『読売新聞』（一月二日～七月二四日）に連載された長篇「あらくれ」であろう。「あらくれ」には女性主人公・お島が男性たちを主導して行う服飾業を中心とした職業の変遷と、それに伴う配偶者の主体的選択が描かれている。その結果は必ずしも成功として描かれてはいないが、本作は男性の労働による自己実現を女性の側が代わって達成しようとする物語と言える。もちろんこれは当時の女性の社会進出を背景にしており、しかしタイピストや記者など都市部インテリ女性の花形職ではなく、庶民の女性の労働を中心に据えたことが秋聲の慧眼であった。

この「あらくれ」に続いて夏目漱石の斡旋で同年に『東京朝日新聞』に連載された新聞小説「奔流」（九月一六日～翌年一月一

四日）は、没落士族の娘として生まれた女性主人公・照子が実業家の愛人（妾）となって生きる物語である。一九一三（大正二）年に発表された新聞小説「爛」（三月二一日～六月五日）『読売新聞』は芸者上がりの女性が本妻を追い落として家庭を持つことに成功するものの、新たに登場した若い女性に自身の地位を脅かされるという、愛人であった女性の終わりなき苦悩を描いていたが、「奔流」の冒頭で「富有者」の岩辻の「困い者」となる照子は、作品の最後まで岩辻の本妻になることを望まない。この「奔流」は、漱石の元へ出入りしていた岡栄一郎を通して連載依頼を受けた秋聲が「娼妓の一代記」を書きたいと申し出て、漱石に「社の穩健主義」に配慮してくれるようにと釘を刺された上で執筆した作品である（秋聲宛同年八月九日付け書簡^①）。本作の照子の生き様は「娼妓の一代記」とは言えないので、漱石の牽制によって事前に書くこうと思っていたモデルから変更された可能性が高いが、以下に見てゆくように秋聲の当初抱いていた問題意識はある程度継承されたのではなからうか。

十六歳で花柳界に出た照子を経済的に庇護する岩辻は銀行の経営者で、のち議員まで務める当代の成功者である。このように世俗的な成功者が登場するのが前作「あらくれ」との明確な違いである。本妻の松子には子がなかったので、照子の三人の子供は松子の籍に入れて育て、彼女が子を成すごとにその地位は安定してゆき財産も増えてゆく。作中の表現を借りれば、まさに「財産が子になる」のである。「爛」では本妻と愛人との階層性が鍵となっていたが、本作では本妻の松子とその公認で本宅へ出入りする照子の間に絶対的な差異は存在しない。その意味で「奔流」の

作品世界は徹底して不道徳であり、漱石が『朝日新聞』の新聞小説で描き続けたような「穩健」な家庭空間とは異質である。漱石はむしろ過去に感銘を受けた「懺」（一九一一年）の続篇を期待していたようであり（前掲書簡）、つまり秋聲に私小説的な家庭ものを書かせたかったようだが、秋聲はあえて反家庭的な、しかし実際には当時の日本のどこかにあったかもしれない家庭の姿を描いたのである。

さて照子は次第に自分の美貌と地位に自信を得てゆくが、貞子ら新しい女たちが岩辻の周囲に現れて不安を募らせる。やがて選挙に立候補した岩辻を裏から支えて見事に当選に導いた照子は、この活動で知り合った萩原と関係ができる。この、女が男を成功させるといふ物語の図式は「錢屋五兵衛」と部分的に共通するが、これをきっかけに自身で身を立てたいと思ひ始める照子は、岩辻と女のところ果敢に踏み込み、彼を厳しく問い詰めるなど、動物的な「あらくれ」のお鳥との連続性を有している。やがて照子は萩原の負債のために自身の貯金を取り崩したことで、岩辻に二人の関係が露呈してしまう。照子は萩原と別れざるを得なくなるが、岩辻はかえって照子への執着を強くする。続いて照子は法律家の梅村と親しくなり、肺病で入院したのを契機に岩辻との別離を考えるとともに、融資を申し込まれた主治医の医博士に自らの裁量で金を貸すことになる。これは照子が銀行家である岩辻の持っていた「力」を模倣し、自らも獲得したことを象徴している。岩辻に梅村との仲を疑われたことで、照子は債権証書などを持ち出し、最後は梅村が入って三万円の財産分与で照子は独立、そして梅村の子と噂される四人目の子を妊娠するところで物語は

終わるのである。

本作について、一般的な「囲われ者」の持つイメージを前掲秋聲宛書簡で漱石が述べた「腕のある女」として反転させた作品であるとする日高昭二は、照子を「重工業の進展による産業革命の遂行を背景にして生まれたいわゆる私的ブルジョワジーの誕生を、その裏側からみつめる役割が課せられている」と見ている。

この岩辻の人物像は「爛」の浅井と連続性があると言えるが、小金持ちの会社員である浅井と岩辻では大きな差異があり、この第一次大戦下の新聞小説は当時勃興しつつあった「私的ブルジョワジー」（成金）をたしかに描こうとしている。付言すれば、本作の要諦は照子とその岩辻を「みつめる」だけでなく、彼の成長を手助けするようにみせながら、最後はその権能を収奪して自立するところにある。すなわち自らの身体を投げ出すしかない無産者として市場に登場しながら、美と知力によって金銭と法律を味方につけた照子が、その身体を取り戻す物語なのである。「あらくれ」が労働と家庭を男性の様に所有しようとする女性を描く小説であるとすれば、「奔流」は労働を再生産する場である家庭の側からそれらを獲得しようとする作品であるとも言えよう。

このように「あらくれ」の問題意識の更なる展開を試みた本作だが、「あらくれ」ほどの物語的カタルシスがない上に、表現面でも同作の焼き直し感があるのが難点であり、残念ながら文壇で高い評価を得ることはできなかった。その後、秋聲は新聞小説における純文学的な長篇から離脱し、停滞の時代に入ってしまったとされる。その秋聲が手掛けるようになるのが、周知のように同じく新聞等を舞台にした「通俗小説」である。

五 「純正な芸術」と「通俗」の間―「誘惑」の試み

たしかに「奔流」以後の秋聲は、最晩年の「仮装人物」（一九三五年）「三八年『経済往来』『日本評論』」まで再び純文学的長篇の筆を執ることはなく、文芸雑誌での短篇を主戦場としながら、通俗的長篇を新聞や婦人雑誌に発表してゆくことになった。その画期となったのが一九一七（大正六）年発表の長篇「誘惑」（二月一日）〜七月五日『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』である。菊池幽芳「毒草」に続き連載された本作は、各地で舞台化される大ヒットを記録し、以後の秋聲の通俗小説作家としての地位を確立した。のち『時事新報』で久米正雄に「蜜草」（一九一八年）を書かせて成功に導いた菊池寛は、その後秋聲に「路傍の花」（一九一九年）を依頼してやはりヒットに導くが、これは菊池が「誘惑」の成功を横目で見ているからであろう。かつては前節で触れた「あらくれ」「奔流」と、この通俗新聞小説「誘惑」との間には大きな断絶があると考えられてきた。つまり純文学から明治期の家庭小説のような大衆文学へと撤退したという見方である。しかし『徳田秋聲全集』（八木書店）の第三期が刊行されたことで、この時代の秋聲の積極的な通俗小説への関与と文壇的成功が明らかになった。このことは自然主義の爛熟期を経て停滞の時代へ、そして心境小説作家へという大正期の秋聲の作家史を覆すものである。

本作「誘惑」は、子への愛のために人生を翻弄される三組の夫婦を描いている。物語は男爵家の貞之助とその恋人・沢子の間

生まれるも、二人が身分違いで結婚できなかつたため、里子に出され岩崎常次・お糸夫妻のもとで育った美都子を軸に進んでゆく。まず男性側は貞之助と別れた沢子に接近してカフエーを出させる、貞之助の義兄・泰造である。泰造は「奔流」の岩辻に相当する人物で、養子でありながら病弱な貞之助を押しつけて久江男爵家を継いだやり手の実業家である。泰造には本妻の蘭子がいるが、彼女との生活に満足できず沢子を囲っており、美都子の間接的な育ての親である。病弱な実父・貞之助は常次の手引きで美都子を家庭に迎え入れ、妻の智慧子とともに美都子を慈しみ育て始める。育ての父であった道楽者の常次は妻のお糸の元から離れていたが、舞い戻ったかと思うと美都子を貞之助夫妻に金銭と引き換えに渡したのであった。

次に女性の側だが、実母・沢子は泰造の出資でカフエー経営を始め、美都子を思いつつ囲われ者の境遇を送っていた。育ての母であるお糸は手放した美都子を思いきれず、貞之助の屋敷を訪ねると、これを哀れんだ貞之助の妻・智慧子はお糸を手伝いに雇い入れる。智慧子は、血の繋がらない美都子を実子の田鶴子と同様に大切に育てる。このように三人の「母」を持つ美都子だったが、お糸はやがて智慧子と衝突して屋敷を出てゆき、美都子を取り戻そうと画策して今度は沢子の元に走る。沢子は智慧子にかけ合つて美都子を奪還することに成功するが、カフエーを廃業し泰造と別れた生活は必ずしも幸福ではなく、久江家での豊かな暮らしに慣れた美都子もなかなか実母に親しまない。また音楽家・浦辺波男の影響で沢子は美都子を女優にする望みを抱くようになり、美都子を画学生の木村美樹雄と結婚させたいお糸、医科を卒業した

弟と結婚させたい智慧子と、「母」たちの思惑はかみ合わない。

この三人の「父」と「母」に加え重要な位置を占めるのが、沢子の弟の庄二と、常次の愛人の芸者・花子の娘・英子のカップルである。庄二は片足に障害を持っており、絵画の道を志すも気持ち乗らずに鬱屈をため込み、姉を弄ぶ泰造を恨んでいる。彼は作中で社会的成功者の泰造を相対化する立場にあり、生きることの意味を自問自答し、食べていくことは「二段」だと宣言する文学青年的な若者である。鎌倉に行った庄二は木村の世話になり、それがきっかけで木村は旧知の美都子に再会する。やがて英子は庄二と恋仲になるが、事務員を退職後に泰造宅に雇われることになり、そこで沢子と別れた泰造に言い寄られる。英子が泰造から逃れたことがきっかけで沢子と泰造との仲が復活し、英子の応援を受けた庄二は絵が入選して新進画家の道を歩み始める。貞之助は楽隠居のような立場だったが、やがて久江家の苦境の中で病に倒れることになる。最後は貞之助が死を迎え、執達吏が久江家の別荘の差し押さえにやってくる。そこへ泰造が建造していた橋が暴風雨で流されたことが電報で告げられ、それは請負師の常次が私利を得るため粗悪な資材を使ったためであったことが露呈する。泰造は絶望の中で国外へ出ることを考え、今後の苦難を思うところで物語は終わるのである。

繰り返すと、これまでの秋聲研究では純文学的新聞小説である「爛」「あらくれ」「奔流」と、通俗的新聞小説「誘惑」以降の作品群は全く別種のもと捉えられてきた。だが、ここまで見てきたように「爛」から「奔流」まで共通してみられる、女性の家庭と労働を通じた自己実現への関心が秋聲に存在し、それがこの時

期から盛んに書き始めた通俗小説の「誘惑」にも継承されたと考えられるのではないか。「誘惑」では三人の「母」に花子も加えて、様々な境遇で家庭と労働に関わる女性たちが対比的に描かれている。もちろんそのようなテーマは、部分的に秋聲の明治期以来の家庭小説とも繋がってはいるだろう。秋聲はすでに女性作家を主人公にした「春光」（一九〇二年）や女性教員を題材にした「女教師」（一九〇五年）を書いてきたからである。しかし、それらでは女性の自立は常に失敗を宿命づけられているという点で時代のイデオロギーに忠実でもあった。また出世作となった「雲のゆくへ」（一九〇〇年）や舞台化された「少華族」（一九〇四年）に見られる政治家や貴族階級のお家騒動を描いた作品や「凋落」（一九〇七年）のような当代の知識人像を描いた作品に秋聲の家庭小説の特徴はあった⁵。その意味でも「誘惑」は秋聲の明治期の家庭小説よりも、時代の近い「奔流」と連続性があるのだ。

なお秋聲は一九一五（大正四）年から翌年にかけて、これまで書き続けてきた家庭小説をほとんど発表しておらず、一九一六年は代表作の可能性が高い「若き生命」（『女学世界』）⁶だけである。その秋聲はすでに「あらくれ」の連載中に新しい通俗小説への意欲を示しており、「通俗小説と純正な芸術上の作品との区別は早晩合一される時があると思ふ」とし「其の時が即ち普遍性のある大きな芸術の現はれる時である」（『屋上屋語』一九一五年三月）⁷と述べていた。そして満を持して書かれた「誘惑」は連載予告で従来の「家庭小説」には「不健全な感情の誇張や嫌味な感傷を強ふるやうな挑発的なものが多い」として「新聞掲載の通俗小説に聊か新紀元を画したい」（一九一七年二月六日『大阪

毎日新聞』『東京日日新聞』と宣言した作品であり、本作で秋聲は通俗小説の革新を目指したのである。このことはすなわち文芸市場の拡大によって生じた大衆読者への視線に起因しており、その市場への意識は同時代の経済的成功者の姿を「奔流」「誘惑」で積極的に描いていたことから裏付けられる。

六 ミッシングリンクとしての「代作」

その「誘惑」が「あらくれ」や「奔流」とやや異なるのは、本作が持つ圧倒的なスピード感である。地の文を最小限に抑え会話を中心に展開してゆく方法は明治期の家庭小説から継承したものであるが、会話も間延びせず連載の数回ごとにテンポ良く次々と場面が変わってゆく。また作中にあるのは先に紹介したように極めて複雑な人間関係であるが、それはほぼ親族間の内部で展開されており、そこには運命の奇縁が通奏低音として流れている。「誘惑」は偶然性に駆動される親族たちの物語なのであり、これは秋聲の純文学的長篇には見られなかった要素である。例えば、みつ子の妹の田鶴子を木村が海で助け、過去に彼が家庭教師をしていた美都子と再会する場面など、実際のところかなり強引な展開が多い。しかし本作は人間の複雑性を描いてもいて、登場人物に過度な性格付けがなされないことで、この不自然さは比較的目的立たないようになっていく。典型的な悪役のように見える泰造も作中で沢子が庄二に諭すように根っからの悪人でないし、逆に庄二の性格も純粹性と屈折として両義的に描かれている。また家からお糸を追いつづける貞之助の妻・智慧子も理知的で思いやりが

あり、後にはお糸と再び交流するようになるのだ。本作にはこれまでの通俗小説にない深みがたしかに存在しており、それが本作の商業的成功をもたらした一つの要因と言えるであろう。

そして、この「誘惑」の性格を、前年に文壇の周縁で密かに連載された「銭屋五兵衛」との関係から考えてみるとどうなるであろう。言うまでもなく両作は一方が現代小説、他方が江戸後期を舞台にした伝記小説であり、その印象は全く異なる。しかし先に見たように、大坂文壇の人気作家・渡辺霞亭のテクストをベースとした「銭屋五兵衛」は、五兵衛の成功が過剰な偶然性の連鎖によって達成される物語であった。また、そのような経済的成功者の栄光と失墜が描かれており、子への愛が鍵となる物語でもあった。秋聲は「誘惑」発表前年の一九一六（大正五）年、「銭屋五兵衛」の完結後に長女・瑞子を疫痢で喪っているので、直接にはその体験が反映されたのかも知れないが、最終部に悠々のテクストを組み込んだことで同作は子のために犠牲になる父の物語ともなっていた。ちなみに「誘惑」は複数の舞台化がなされたが、旧知の真山青果（亭々生）が脚色した舞台には冤罪で投獄される貞三郎というプロットがあり、これも「銭屋五兵衛」を思わせなくもない。この青果演出の舞台はかなり秋聲との相談の上で成立したようであるが、当初は泰造がドイツへの銃器の密売を企むという場面が入っていたものの当局に睨まれて上演ではカットされたという¹⁹。

さらに「銭屋五兵衛」の前に視点を広げてみると、秋聲は「奔流」で実業家の岩辻を内助によって選挙で当選させる照子を描いた。前述のように岩辻の存在は単に大戦景気の世相を取り込んだ

結果だけでなく、秋聲自身の経済への意識が関わっていると考えられる。また仮に「銭屋五兵衛」のお芳を望んだ男性の家庭に入らなかった女性と見れば、没落士族の娘・照子の位相は案外遠くない。そして、この「奔流」の家庭を数倍複雑にして、「銭屋五兵衛」の偶然性に満ちた物語的な速度を加味するとかかなり「誘惑」に近づくのではないか。だとすれば、秋聲は稀代の売れっ子小説家・霞亭のテキストを援用した「銭屋五兵衛」で新しい時代の通俗小説のあり方を学習したと言えるかも知れない。

翻って通俗小説の側から見るとすれば、ここで加えられたものはなんであつたらうか。それが前述の人物造形であり、またテーマ設定として「奔流」から持ち込まれたものであつた。山本芳明は前掲「屋上屋語」の秋聲の発言を最も早く実作で実現したのが長田幹彦であるとした上で、通俗小説に「人間」の問題を盛り込む「秋聲―幹彦ライン」が、「面白くてしかも本当らしい小説」を目指した菊池寛「真珠夫人」（一九二〇年）のラインとは異なる大正期の通俗小説の一方向であつたと論じている。通俗小説に切実な主題と複雑な性格を持つ人物たちが演ずる「人間」の物語を導入することで成立した群像劇「誘惑」は、物語性の強い霞亭版「銭屋五兵衛」に父子の絆と悲劇を悠々版「銭屋五兵衛」のラストから組み込んだ秋聲版「銭屋五兵衛」と実によく似た姿を有しているのである。

すなわち、一九一六（大正五）年に発表された雑誌連載小説「銭屋五兵衛」は、言うなれば秋聲長篇の純文学的作品と通俗小説をつなぐ「ミッシングリンク」であるということだ。もちろん、これは秋聲がそこまで明確に意識して「銭屋五兵衛」に携わつた

というのではなく、結果としてそのように見えることの方が重要である。本稿の前半で述べたように「銭屋五兵衛」は代作の可能性が濃厚であり、名義上の著者がどの程度執筆に関わつたかは不明である。しかし、ここまで見てきたように、秋聲の名で銀行の発行する小雑誌に掲載された作品は、たしかに両者を架橋しており、「爛」あらくれ「奔流」から「誘惑」以降に至る大正期の秋聲の作品史に「銭屋五兵衛」を置いてみることによつて、その流れが意味を持つて現れてくるのだ。

だから、この場合本人が実際に執筆しているかいないか、どれくらい関わっているかの判定にはさほど意味がない。とはいえ、逆に言えば本作が実際に代作であつたとして、以上の経緯から秋聲がテキストの選択（特に悠々版）に関わつていた可能性は高いのではないかと推察できるし、少なくとも原稿には目を通していたと考えてよいのではなからうか。つまり編集者の役割としての創作への関与である。いずれにせよ、ここでは「代作」があたかも見えざる媒介者のように重要な役割を果たしているのであり、その存在の発見によつて様々な作品をつなぎ合う間テキストの様相が開かれるのである。

注

- (1) ただし、HP「日本の古本屋」の検索結果より、同誌が第四五八号（一九四三年）まで刊行されていたことを確認できた。文生書院取扱「日本勸業銀行月報／日本勸業銀行債券月報 二八〜四五八号の内一九五冊」(https://www.koshu.or.jp/products/detail.php?product_id=295462352、二〇二二年一〇月二二日閲覧)

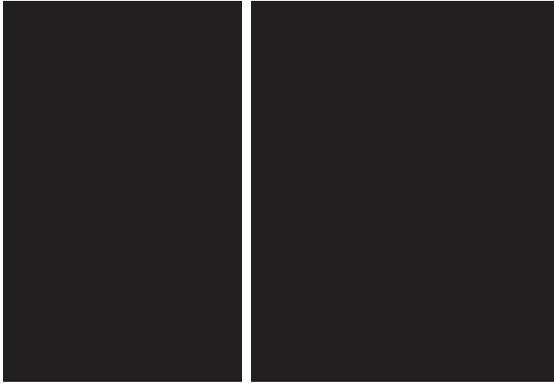
- (2) 「水野葉舟略年譜」、佐藤浩美『忘れえぬ赤城―水野葉舟、そして光太郎その後』(二〇一一年、三恵社)
- (3) 岩本由輝『もうひとつの遠野物語 追補版』(一九九四年、刀水書房)、横山茂雄「解題 怪談の位相」(水野葉舟『遠野物語の周辺』、二〇〇一年、国書刊行会)
- (4) これについては「錢屋五兵衛持ち船一覽(一八二六―一八五二)」「(前掲) 錢屋五兵衛と北前船の時代」を参照した。
- (5) 単行本は梁江堂版も霞亭会版も全十二章立てであり、章分けと章題は初出紙とかなり異なっている。なお新聞連載時の紙面には霞亭の署名がない。
- (6) 実際はその可能性もなくはないと考えるが、現時点では証拠もないのでこゝまでにとどめておく。
- (7) なお、この五兵衛の陳述の書記役を務めた同心の口書の引用部分に、秋聲版と悠々版は部分的に返り点があるのに対し、犀東版はほぼ同文ながら返り点がないことも、秋聲版が悠々の書物に依拠した可能性が高いことを示している。
- (8) 『徳田秋聲全集 別巻』(二〇〇六年、八木書店) 収録年譜(松本徹作成)、「大正六年二月初め」の項目参照。
- (9) たとえば秋聲に関わる論だと下岸大助『赤い鳥』と代作問題―徳田秋聲「唐傘」・芥川龍之介「犬と笛」ほか』(二〇一九年一〇月「国語と国文学」)など。
- (10) 金明哲編『文学と言語コーパスのマイニング』(二〇二二年、岩波書店) 収録のいくつかの論や柳輝佳・金明哲「菊池寛「受難華」の代筆問題の研究」(二〇二〇年八月「データ分析の理論と応用」)、孫昊・金明哲「川端康成の小説『花日記』の代筆疑惑検証」(二〇一八年二月「情報知識学会誌」)などが挙げられる。
- (11) しかし、その岡が交渉の途中で漱石に断りなく下阪して大阪朝日に入社したため、漱石が直接秋聲に手紙を書いて依頼したと

いう経緯があった。

- (12) 「浮上する身体」『徳田秋聲全集 第十一卷』解説(一九九八年、八木書店)、のち「重ね書きする」/される彼ら 大正文学論集』(二〇二二年、翰林書房)。
- (13) 紅野謙介も本作を「第一次世界大戦によるパブル景気を受けて、経済にふりまわされていく男女の人間模様が描かれる」作品とまとめている(「研究のキーワード」紅野謙介・大木志門編『二一世紀日本文学ガイドブック六 徳田秋聲』二〇一七年、ひつじ書房)。
- (14) ただし同作は雑誌(総合雑誌)連載であり、新聞小説における純文学的長篇は最晩年の「縮図」(一九四一年『都新聞』)を待つことになった。
- (15) 「凋落」は松本徹が花袋「蒲団」との類似性を指摘している(「秋聲と花袋」『徳田秋聲の時代』二〇一八年、鼎書房) ように、むしろ「黴」(一九一一年)に到達する以前の自然主義的長篇の試行と捉えられる。
- (16) 同じく松本徹によれば、本作は「黒潮」として掲載された第一回は「わざとらしい稚拙な比喩など、秋聲のものではない」が第二回で「若き生命」と改題されてから安定するので「力量のある者に替わった」か「秋聲が大幅に手を入れるようになったのかもしれない」と(「代作の季節」『徳田秋聲の時代』収録)。実際に石川近代文学館にはタイトルを「若き生命」と改題した第二回の秋聲自筆原稿が残っている。
- (17) 「誘惑劇の梗概(大坂日日新聞)」(『徳田秋聲全集 第三十六卷』二〇〇四年、八木書店)
- (18) そのことは「誘惑」劇化中に青果から秋聲に送られた書簡などから明らかになる(二〇〇四年五月『徳田秋聲全集月報四〇』参照)。

(19) 小林修によれば乙鳥「六月の浪花座」(一九一七年六月『新演芸』)に「久江男爵が請負師の常次を手先に使ひ貞之助を犠牲として独逸へ兵器弾薬を売込まうといふ作者の彩りがつけてあつたが其筋からお差止めとあつて荒川の改修に不正工事をやるといふことに訂正」されたと〔解説〕『徳田秋聲全集 第三十六卷』、傍点は引用者による。

(20) 「徳田秋聲の通俗小説論をめぐって」(二〇〇四年一月『徳田秋聲全集月報三八』)



『日本勸業銀行月報』131号表紙(右)
徳田秋聲「銭屋五兵衛」第1回冒頭(左)
(ニシヅキサヲナ氏蔵)

(おおき
しもん
東海大学教授)